

ワークショップ「多文化共生をめざして」

海外子女教育・国際理解教育研究協議会

副会長 明神 洋

記録者 富谷 忠明



ワークショップとは

参加者自身が共同作業を通じて何かを作り上げる参加型学習方法をワークショップと呼びます。

【今回のワークショップの展開概要】

- 1 積極的な参加と場の雰囲気をはげめるための活動
- 2 「スポーツブランドを考える」というテーマで展開
- 3 マラの物語を読んで、マラの生活がよくなる手だてを考える。
- 4 ふりかえり

具体的な活動については、以下のように展開された。

- 1 積極的な参加と場の雰囲気をはげめるための活動が行われた。

活動（1）隣同士（2人1組）で自己紹介をする。

内容は、①名前 ②所属 ③研究会に参加した目的 ④好きなスポーツ

活動（2）他己紹介をする。

全員の前で、3組が隣の人を紹介する。

活動（3）好きなスポーツで4人1組のチームをつくる。

全員が「好きなスポーツは何か。」とお互いに会話をしながら、同じスポーツの人を見つけて次々と仲間を広げて4人1組を作っていく。

今回は、野球・卓球・ゴルフ・剣道・テニス・・・などに分かれた。

〈感想〉

（1）～（3）の活動を通して、参加者の気持ちは解きほぐされ和やかな雰囲気となり、参加者同士が知る合うことできたり、次は何をするのかなという期待が高まり、明神先生の話術の中に引き込まれていった。

- 2 「スポーツブランドを考える」というテーマで以下の展開が行われた。

4人1組のチームで活動する。

発問（1）スポーツブランドには、どのようなものがあるか。

A：参加者がいろいろなブランド名を発表する。

発問（2）スポーツシューズはどのような流通で手に届くだろうか。

グループの発表から

A：消費者 ← ショップ ← 企業 ← バイヤー ← 工場 ← 労働者
という流通の流れが確認された。

活動（3）チームにそれぞれの役割（消費者，ショップの経営者，企業の経営者さらに労働者）を決め，それぞれの役割に課題が与えられチームで考えて発表する。

〈課題〉

①購入者のチーム

世界の若者は，ロゴの入ったスポーツウェアが大好きである。

Q：なぜブランドのスポーツ用品を買うのか。

②ショップのチーム

お店は常に新しいデザインの品を求め，小口の注文をする。

Q：なぜお店はいつもニューファッションを置いておきたいのか。

③企業のチーム

先進国の企業は広告と売り上げ向上のため膨大なお金を使います。スポーツウェアを作る工場は他の国で行います。

Q：なぜ先進国の企業は自国で生産をしないのか。

④バイヤーのチーム

企業に雇われたバイヤーは貧しい国々を探し，安く作れる工場を見つけブランド物を作る契約を結びます。

Q：低価格でブランド物を作らせることをどう思うか。

⑤貧しい国の工場のチーム

貧しい国の工場では，何千人という人を雇い，外国の企業のために生産し世界中に届けられます。

Q：工場はどうしたらたくさん儲けることができるか。また，注文を間に合わせるためにはどうすればよいか。

⑥工場労働者のチーム

労働者は，賃金は少なく労働条件は悪く，超過勤務が日常化しています。

Q：どうして労働条件がこんなにひどいのか。

3 マラの物語を読んで，マラの生活がよくなる手だてを考えよう。

『マラは，25歳。カンボジアの工場で低賃金，超過勤務の過酷な労働条件のなかで家族を助けるために働いている。』という内容である。

それぞれの立場での手だてをチームで考え，発表した。

4 ふりかえり

- ・身近な生活を見直し，ものごとの関係性を考えることも大切である。
- ・ワークショップでは，与えられたことや知識だけでなく，自らの「気づき」が大切である。
- ・指導者は，参加者を引きつけるためにも役者になりきることも大切である。
- ・フェアトレードという活動について，簡単に紹介された。

